

## いつの日か

吉野東中学校 三年 春花 真美

舞台の幕が上がる。スポットライトを浴びる私。演劇部として何度も舞台上がっているが、やはりこの瞬間は緊張する。しかし、今度の劇は、これまでで一番真正面から、役について考え、迷い、悩みながら取り組んできたもの。精一杯演じて、今の私の中にあるカラー写真を見せるだけ。私はそう決意してこの舞台に立ったのだ。

「戦争」って何だろう？私は、戦争を実際に体験したことはない。私の曾祖父は、戦争に行き、生きて日本へと帰ってきた。そのことを私は、母から聞いたことがある。しかし、実際に曾祖父から聞いた訳ではなく、なんだかとても昔に起こった、自分とはあまり関係のない出来事のように感じていた。

そして今年、私は中学三年生になった。私が所属する演劇部が、最後に演じる劇が、戦争を題材とするものと決まった。そして私は、その劇で主役を演じることになったのだ。

主役が決まった時、私の心の中は、二つの気持ちで揺れていた。中学生生活最後の劇で主役を演じることができるといふ喜びと、戦争を体験した人たちの実際の苦しみや悲しみを私が、表現することができるのかという不安である。

劇の内容は、戦争中に病気で入院している少年少女たちの話。主人公は、脳に腫瘍があり、余命いくばくもない。しかし、同じ病院に入院し、いざれ治る予定の友達が、空襲で自分より先に命を落とす。主人公は自分のせいで友達が死んだと自分を恨むが、奇跡的に残った友達からの手紙を読み、主人公は、「死んだ友達の分まで生きよう」と決意する。

私は、練習を重ねるうちに、劇なのだがとても心が苦しくなってきた。あまりに心が苦しくて、次の台詞が口からでないこともあった。しかし、私が演じる中で感じる苦しみや悲しみの何倍も何倍

も、実際に戦争を体験した人たちの心の中は、傷ついていたはず。そう思うと、自分の演技ではまだまだ足りないと感じた。

私は、これまで戦争について、上辺で知っていただけだった。本気で考えようとはしていなかった。戦争を教科書に載っている歴史上の事実として理解し、修学旅行の訪問先の一つとして原爆の地を訪れ、昔話として曾祖父の話をもつて聞いていた。これまでの私にとって戦争とは、あまり現実味のない、まるで白黒の写真のようだった。

それが、今回戦争を題材とした劇を演じることで、私なりに精一杯戦争について考え、登場人物の気持ちに近づこうと努力した。すると私の中の戦争が白黒の写真から、少しずつ色のついたカラー写真へと変わっていく気がした。以前よりずっと私の中で戦争が、現実味を帯びてきたのだ。私は、これまで戦争を分かったと思いつき、分かつたとは思ってはいなかったことを深く反省した。

今年日本は、戦後七十年の節目の年を迎えた。七十年前とは、国民の生活も大きく変わり、そして日本を取り巻く環境も絶えず変化を続けている。そのような中、戦争を風化させてはいけないという警鐘の音が、年々大きく叫ばれるようになっていく。私は今年、やとその警鐘の音が、自分にも向けられていることに気がついた。

私は、戦争の劇をたった一度演じただけで、戦争の本当の苦しみや悲しみを理解したとはまだ言えない。だから私は、これからは自分の中の戦争がもっと色鮮やかなカラー写真となるよう、さまざまなことを自分に関係があることとして捉え、考えていこうと思う。私は演劇が好きだ。中学を卒業し、高校へと進学しても演劇を続けていく。そしていつの日か再び、戦争を題材とする劇を演じることがあったなら、私はその時、今よりもっと色鮮やかになった私の中のカラー写真を観客のみなさんに見てもらいたい。